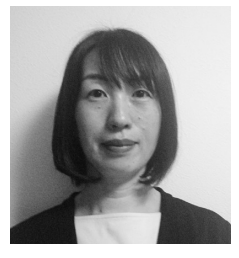


私 の 工 夫

「わかる」「できる」喜びを感じ、学び続ける児童を育成する算数科の授業づくり

真庭市立天津小学校

指導教諭 藤本 直子



1 はじめに

本校では、令和3・4年度の2年間、校内研究テーマを『わかる』『できる』喜びを感じ、学び続ける児童を育成する算数科の授業づくり」と設定し、研究を行った。本校の課題の一つとして、学力の個人差が大きく、児童が学習に受け身になりがちな傾向があった。そこで、どの児童も喜びを感じながら学び、次の学びや生活へと学びをつなげていけるような授業づくりを目指すこととした。

2 研究内容について

① 課題設定の工夫

・児童が興味のある問題や情報不足の問題など、児童が「解いてみたい！」と思えるような問題

② 課題解決の工夫

・教師と児童の一问一答ではなく、問い返しをして児童をつないだり、考えを広げたり深めたりできるようにする。
・ペア・グループ学習の効果的な活用をする。

③ まとめ・振り返り

・授業の中のキーワードを板書に位置づけ、それを使って児童が自分でまとめができるようにする（低学年は教師と一緒にまとめる）。

提示をする。

・既習事項の想起や具体物の操作などにより、児童が解決への見通しをもてるようにしてめあてにつなげ、自力解決の活動に入れるようにする。

④ 各学期ごとに重点単元を決めて取り組む。

・チェックシート（図1）を活用し、課題設定や課題解決の工夫ができたかを担任が毎時間自己評価して振り返る。
・重点単元に取り組む時期を知らせ、お互いに授業参観をする。

⑤ 授業の進め方の共通理解

・令和4年度当初の校内研修で模擬授業を行い、前年度の研究により積み上げた前述①②④の取組を授業にかかわる全

（ ）年算数 単元（ ）

できた、できなかった

時	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	総合評価
①問題解決の工夫ができた												
②半分以上の児童が自分の考えをもつことができた												
③授業中いつでも、考えを切り取り発表する機会が十分にあり、思い通りの工夫ができた												
④ペア・グループが効果的に活用できた												
具体的な取組												
成果・課題												

①、②
8割以上〇…よくできた
5割以上〇…できた
5割未満〇…あまりできなかった
2割未満〇…できなかった

テストの点数（学期の平均）
知識・技能 思考・判断

（図1）チェックシート

算数の指導で大切にしたいこと

真庭市立天津小学校
研究推進学力向上部

【板書例】

4 / 12

問題
* 書く、または貼る。

見直し

めあて
自分の考え

まとめ
練習問題

【問題を読みとく】

分かっていることには _____
たずねられていることには _____
答える単位は〇でかこむ。

よい「はかせ」

- ・はやい
- ・かんたん
- ・せいかく

【大切にしたいこと】

- ★前時までの学習内容、キーワードなどを提示しよう。（視覚的支援）
- ★学習内容に応じて、ワークシートを取り入れよう。（分数や図形などの単元）
- ★算数用語をきちんと指導して使えるようにしよう。
- ★単元を見通して考え、本時の指導のポイントをおさえよう。

効果的なペア・グループの活用とは？

- ①説明をしながら、自分の考えを伝えるため
- ②自分とはちがう考えを知るため
- ③学んだことを確かめたり、説明する力を高めたりするため

自力解決や練習問題の場面など

話し合う目的を明確にして、児童と共有することが大切

授業の中で大切にしたい3つのT

- ①つまずきや異なる考えを「とりあげる」
- ②児童の考えを「問い返す」
- ③ほかの児童に広げるために「つなげる」

（図2）共通理解している「算数の指導で大切にしたいこと」



(図3) 授業の様子

教員で確認し、本校が目指す算数の授業について共通のイメージをもって授業づくりに取り組めるようにした。(図2)

3 実際の授業

第1学年 算数「ひきざん(2)」

(第1時) (図3)

【本時の目標】(十何)ー(一位数)で繰り下がりのあるひき算について、数図ブロックを操作し、計算方法を見いだすことができる。

①課題設定の工夫

・「かきが13個なっています。いくつかとりました。残りは何個

ですか。」このような情報不足の問題を提示し、1個、2個の場合から式と答えを問うようにした。既習と未習をはつきりさせ、「10といくつの『いくつ』からひけないひき算について考えよう」という単元の課題をつかみやすくすることができた。

・「9個とつたら残りは何個になるか」と問い、数図ブロックを使えば分かりそうだという見通しがもてたところで、めあて「ブロックをつかって、のこりはいくつかかんがえよう」を児童と確認した。

②課題解決の工夫

・立式をするとき、児童の発表に「どうしてひき算になるの?」「本当に?」などと問い返しやゆさぶりの発問をすることで、「だって:」と児童が自分の言葉で根拠や考え方を説明することができた。児童の発言とともに、児童の疑問や押さえないポイントを確認することにより、全員が納得して進むことができた。

・日頃の授業の中で、多様な反応を引き出し、児童同士のやりと

りのきつかけとするため、児童の自然な反応の言葉を大切に、短冊に書いて掲示することで価値づけてきた(図4)。本時も、児童は友達の発言に対して「そういうことか!」「どうして?」「分かった!」などの反応をする姿が見られた。それを教師が拾いながら児童の発言をつなげ、課題解決ができるようにした。



(図4) 反応の掲示

③まとめ・振り返り

・キーワードを板書に残すことを全学級で共通理解している。まとめの場面では、「今日新しく

分かったことは何かな」と投げかけ、キーワードの「10のまとめ」から「ひく」ことを使って、「ばらからひけないひきざんは、10のまとめからひくとかんたんにできる」と児童と一緒にまとめることができた。

4 おわりに

2年間の研究により、児童の学び方や学びに向かう姿は大きく伸びたと感じる。その根幹にあるのは、教師の授業づくりへの意識の高まりである。例えば、重点単元の授業を参観した教員と授業者が、放課後自発的に声をかけ合って集まり、授業について振り返りの話し合いをもつ姿が見られた。次時からの授業のポイントや手立てについても助言し合い、授業力を向上させる場となっていた。

今年度、私は授業改革推進員として本校を含め5校の先生方にかかわらせていただいている。これからも自分自身が学び続け、児童が学ぶ喜びを感じられる授業づくり、そして授業について語り合う学校風土の醸成に貢献できるようにさらに努力していきたい。